

## 日蓮聖人降誕七百五十年の意義と教団伝道

伝道部長 長谷川 正 徳

第四回の教研会議の企画の当初にあたりまして、「大聖人降誕七百五十年の意義と教団の伝道」について話せとの仰せを現代宗教研究所から頂戴しました。その時点では九月のこと故まだ日時もある、というような気持でおひき受けしました所、伝道部という部所の関係で、東へ走り西に飛び、ほとんど席の温たまった暇がありません。たまたま院へ帰れば院の用務が山積しておる状態で、ほとんど勉強の時間が得られませんでした。その為にとめる事が出来

ず実は昨晩三時頃までかかって、あれこれメモしてここに立ったのでありますが、正直な所まったく左様な次第でございますので不備の点不足の箇所、もただでないほとんど全部であります。そこはご賢察賜わりましてご叱正頂戴出来ませすれば有難いと存じます。

実は慶讃会の方から予算措置が興ぜられまして、伝道部が企画して『聖誕』なる記念のグラフを発行しました、既

に御覧になられた事と存じますが、あの聖誕の中で日蓮教団の使命と実践、還帰即前進、前進即還帰といった表題で拙論を載せました。その中に七百五十年の意義について末尾の方でふれたつもりであります。今、あとの教団の伝道へ関連せしめる為に、簡略ながらその事にふれてお話しをさせて頂きたいと存じます。

御存知の通り大聖人は、『妙密上人御消息』の中で「日蓮はいずれの宗の元祖にもあらず、又、末葉にもあらず」(一一六五)と仰しゃっております、これは私は重大な御発言だと思います。仏教の中の一つのセクトを開くのではない、仏教の中でセクタリズムを開くのではないと仰しゃっております、これは御存知の宗祖のあの出家得度勉強の下に涌気しておりました疑問の解明にかんがみましても、当然のお言葉であり御正意と拝されるのであります。

四月二十八日の旭ヶ森における唱題は単なる一宗の開教

宣言であられたのではなく、まさに釈尊正統仏教の弘教の宣言であられたと申すべきではありません。

ところで大聖人の教法という、或は把握し確信せられたものは、三つに要約する事が出来ると思うのであります。

末法という時代の一切の苦悩を救いきる教法は、ただ法華経の奥底、事の一念三千無妙法蓮華経の五字七字あるのみということ、それによらないが故に人間不信と断絶が顕われて来る、そして天変地天も起つて来るのであるということ、したがって現在鎌倉期において流布されている南都六宗、平安仏教二宗、それに当時弘まりつつあった禪と念仏、八宗十宗いずれもその内密や時代性への適応という点からいって、釈尊正教の真髓ではないということ、この三点に要約する事が出来ると思うのであります。そしてこれは皆様御存知のアンドレモローが、初めに行動があったという論文の中で、もっとも深い革命は精神的なものである、精神革命は人間を变革し、今度はその人間がその世界を变革するといっております。ここで革命の論議にふれる時間はございませんが、これと同じ発想とみていいと思うのです。

それはさておきまして、大聖人は以上申し上げました点からしまして、まったく純一無雜の法華経信仰に生き通されたといえるのであります。

我々は簡単に信仰といい、信心といいます。そして教義

学の上では信とは随順の義なり、信とは何々の義なりと申しますが、私は信というものを、信仰というものを実存の面からいつも考えております。要するに信仰とは人間の実存の一つのありかたであるということ、実存とは御存知の通り人間存在というものは、事物や単なる生物的存在ではない所の特有のあり方であります。自己や主体である事を自覚するありかたであるともいえます。そして自己が自己自身において、実存というものを成立せしめなないと知った時、それに気付く時何らかの他者とのかわり、いわゆる出会いという言葉があります。出合がむしろ実存を可能にする事を知るのであります。ですから信仰とは実はその様な出会いという問題であります。

大聖人は血みどろの遊学研鑽によって法華経との出会いをとげられた、そこに宗祖の信仰があるのである。そして大聖人の法華経との出会いは、この経において開顕された久遠本仏との出会いであった。

さらに出会いという事をたとえれば、今私が時計をみてゐる、一時十分、みる私が主体でみられる時計は客体、みるというポーズは主体でみられる方は対象として客体であります。出会いとは主体と客体のポーズでなく相互に主体となる関係、私が時計をみる、時計がまた私をみる、時計と私が相互主体関係において出会いというものがある。そうしてその関係を可能にするものを現主体、キリスト教的

用語をつかって恐縮ですがその方がわかりやすいと思ひまして、そうした出会いというものを、又相互主体の関係を可能にする根源的なものにする現主体、信仰とはまさにこの現主体とのかかわりであり、それによって活かされる己のあり方である。

大聖人は法華經とまったく相互に主体となる関係を結ばれ、それを可能にした根源、現主体である久遠実成本師釈迦牟尼仏、これがあつたのであります。

たとえば「日蓮は日本第一の法華經の行者なり、日蓮が頭には大規世尊やどらせ給う」、まさしくこれは南無妙法蓮華經と宗祖は相互主体であります。宗祖は法華經を擱み法華經は宗祖を擱んでいる、ここに宗祖の実存としての信仰があると思うのであります。ですから大聖人の実存である信仰が崩れるはずがありません、宗祖における信仰が崩壊する事は自らの生命を否定する事でもあるからであります。従つて宗祖は法華經の行者として行ずる者としての態度をとり、学者じゃない、単なる学問として法華經をみる場合は、みる側が主体でみられる法華經は対象論理的にかまえられる客体であります。宗祖は決してそうではなかつた、大聖人の実存である信仰はもはや崩れるはずはないこの実存の立場におられたが故に「大難四ヶ度、小難数ぞ知れず」、それはそのまま法華經に予言せられた中味の真証である。だから喜び、歡喜としてこの法難を受け止めて

おられる、そうして大聖人の忍難慈勝としての生涯と、誓願と伝道はいうまでもなく、立正安国に尽きたのであります。

ここで国について申し上げる時間はございませんが、この場合、権力機構における国家概念をかりそめにも脳裏に浮べたとしたならば、それは明らかに間違いであります。依法正法もむしる国土であります。ここへ国家概念をもちこむと大変な事になる、ともかく宗祖の誓願と伝道をつきつめて申し上げれば立正安国、正法を立てて国土を安んずるこの一点にあつた事は申すに及びません。正法たる法華經が弘まつて初めて、地上の平和も庶民の幸せもありうるというのであります。そうして大聖人の誓願と伝道は、七百五十年前の歴史的な現代的な現実的の中から生れて来た、それが現実を動かすエネルギーとなつて教団の形をとり、今日に伝承されて来たといつていいであります。

ここにおいて私どもは新ためて一九七〇年代の今日の歴史や社会の現実の中で、我々が教団の使命とか実践とかについて、深く思いを回らわしてみなければならぬ。教団は既に七百年の歴史を得、それは重く厚い伝統となつて我々に引き継がれて来ているのであります。

ここで申し述べておきたい事は、歴史とか伝統とかいいますが、歴史とか伝統というものは、たえずそれが未来に向つて再創造されるものでなければならぬということ。

創造作用をあらたに生み出す力を失った伝統というものは、伝統という名にあたいしない、それは形骸である、単なる形骸といえるのではないかと思うのであります。歴史や伝統が尊とばれるということは、それが常に現実形成の主体的エネルギーとして活き活きとした具体的な命をもっている場合のみであるといえるのであります。我々みずから我が教団をかえりみて、形骸であるか新たに具体的生命を生み出す生命力を持っているのかお互いに胸に手をあてがえるべきでしょう。

ところで大聖人は法華經との出会いにおいて久遠本仏に直に融れられた訳けです。そこに大聖人の宗教とあの逞しい弘教の実践があつたといえましょう。そこで今日大聖人を礼拝し、大聖人を供養し、慶讃すること一つに深い意義があるにいたしましても、ただそれだけにおわってしまつたならば、大聖人の生きた宗教は枯れしぼんで行くほかはないと思うのであります。

去る二十六宗会においても議場にほうはいとして起つた事は、伝道教団へ新制を遂げようでありました。まさに教団の体質は本質的に伝道的なものにして行けという事でありました。

ところでその伝道教団への生れ変りということは、実は今申し上げた様な事柄の嚴肅な思考と反省の上に立つて、ともすれば固定化しておる、立法化しているいわば信仰の

形骸化をみつつかあるという状況から脱皮して、先ず我々教師一人一人が、本仏と自己との絶対現在のな關係に立ちもどり、宗祖の信仰実存にみずから置くという所から始めて可能になって来るのではないでしょうか。あちらのものをこちらえ、こちらのをあちらえと同じ次元でいじくりまわすという所のものには、新たな物は出てこないように思う。真に大聖人の信仰と実践に生きようとする者は七百年前に著わされたあの立正安国論をまる暗記する事ではない、訓話注釈的に遂字釈する事でもない、自らの現在において立正安国の願業に生きる事、換言すれば、一人一人自らの立正安国論を書くという事のように思う訳であります。

降誕七百五十年の慶讃とは、大聖人様おめでとう御座居ますと申し上げる事であり、まさに大聖人の根本精神に帰えるという事であります。また大聖人の精神に帰えるという事は、大聖人が歴史的現実の中で経験された本仏との交わりを、そして立正安国の実践を今我々は、我々の現実に即して新たに経験するということ事でなければならぬと思うのであります。それゆえ七百五十年昔を偲ぶという事それは、現在を捨て過去に入るという事ではない、それでは尚古主義です、とかく教団にみられる事は尚古主義、昔を尊ぶ尚古主義、そこに固定化、立法化がどうしても出て来る、そういう尚古主義でなくてむしろ本當に現在となる、

今の一瞬一瞬に新たな経験に入るといふ事でなければならぬのであります。私はそれを還帰、七五〇年昔を還帰すること、還帰しつばなしではどうしようもない、そのことは同時に前進である、そして前進の為に常に還帰が行なわれなければならぬという弁証法、それを私は還帰即前進、前進即還帰において七五〇年をとらえなければならぬと考える訳けであります。

今や人類は「核」と「公害」という二つの恐るべき魔に襲われております。人類絶滅の危機にさらされているという事は決して大げさな方ではない、核保有国によって貯蔵されている核爆弾は、一九三九年、ハーン・ストラスマンによって、原子核エネルギー解放のみちが発見されて三十年余、世界の大きな転換は原子力を一つの軸として展開してきている。今後もまたそうでありましょう。これまでの歴史上のあらゆる戦争に用いられた全爆発物のエネルギーの総計、第二次世界大戦の全爆発物は六メガトンであった、TNT火薬百万トンが一メガトンですね、一発で地球上のいかなる大都市でも瞬間に焼却してしまうといわれている。しかるに現在米、英、ソ、中、仏に保有されている核は三十二万メガトン。なんと三兆二千億トンのTNT火薬に相等する。ある学者によれば地球を百五十回破壊するエネルギーだといっております。この事を離れて我々の立正安国の論理はありえないと思ふのであります。

また環境汚染の公害は生命体系の破壊の段階に進行しております。今にして核と公害に象徴される現代テクノロジー文明、科学技術文明とこれを支える諸矛盾に向つて深くメスをいれ、これを解決するカギをさぐらなかつたならば人類は死滅以外にその行くべき道を知らないであります。

かくして我が日蓮教団は慶讃七五〇年の喜びの中に、今日ほど大聖人が必要であるという事、教団の一人一人が立正安国論を書くのだという気概をもって、本仏の光に結ばれ、仏国土の現実をめざして精進しなければならぬという事、これを銘記すべきであります。そこに七五〇年の歴史的、実践的、現代的意義があると私は考えるのであります。

こうした現実を見逃してどこに我々の立正安国があるのか、公害につきましてはさる二十六宗会の時、教団の伝道にどう取り上げるべきか、たえず思考し、またそれをどのように伝道し伝えるべきかという、公害問題に対決する姿勢をとっております。

若干公害についてふれる事にします。例えば、現在石油の使用量は十年ごとに倍増し、このままでゆけば西暦二〇〇〇年には世界中で二〇〇億トンに達し、その燃焼のために消費する酸素量は、陸上の植物や海のプランクトンが産出する酸素量をはるかに超えてしまう。しかも植物はどん

どん切り倒され、海のプランクトンは廃油その他の汚染物で光合成を妨げられ、酸素の産出ができなくなる。とうぜん自然界はアンバランスして、それによってもたらされる自然の荒廃は人間の生存を根底からゆさぶることになるのであります。こうした問題をぬきにして立正安国はありえないのであります。

ここで、我々が考えねばならぬことは、公害について、その悲惨さや恐怖についてかく語るのみでなく、このような事態を生ぜしめた現代文明がどういう基本的性格をもちその性格が何に起因するかということ、つまり現代文明の発想の基盤がどこにあるかということを明らかにすることが必要であると思っております。

高度な文明文化の発達とは逆に、人間はますます小さくなってしまったパラドックスであります。今人間はそれに気付いてきています。一人人間とは何か、今本屋で人生論が一番売れるといっていました。人生いかに生きるべきか。これが意味しているものは人間疎外ですね。一体俺とは何んなのだ、生きているとは何んだらう。現代社会は機械の原理によって進行しているのだといえましょう。機械の原理が人間を支配している。アイン・シュタインが今日の社会はあまりにも科学が発達しすぎた、今これをつかひこなす精神文明の発達をみなければならぬ、といいましたが、私は科学が発達しすぎたとは思わない、すぎたとは

何を基準にアイン・シュタイン先生が云うのか私にはわかりませんが、今これをつかひこなす精神に、この偉大な科学者が着眼していることは、当然でありましょう。あるいはアーノルドトインビーの十九巻目が出ましたが、彼は共存共栄の唯一の道を選ぶには、文明が生み出した高等な宗教による人間の救済こそ最高の価値がある、その次の所にキリスト教と大乘仏教との対話の中から生れてくる宗教、との示唆的な言葉が出てくる、かつて梅原猛先生がトインビーが来たときに、先生はキリスト教的神論、仏教的汎神論の対話の中から生れてくる宗教と申しましたが、今少し具体的にご説明を願いたい、と申しましたところ、いやまだその説明の段階にはいたっていない、梅原君、きみはどう思うかね、といって話しを切ってしまったそうですが、我々は、これは「如来寿命品」を中心とする法華經においてはたされているといったならば、トインビー博士は笑うでしょうか。

宗祖における本尊観というものは、『日女御前御返事』に説れる「此御本尊全く余所に求むる事なかれ、只我等衆生の法華經を持ちて、南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり」(一三七六)、これはきわめて常識的表現であります、私は一神論と汎神論との対話というものは、本来大乘仏教の中で充分になされている。しかも法華經において完結されている。トインビー博士はまんべん

なく大乘仏教をみるのではなく、しばらく法華經と取り組んで欲しいとさえ思うのであります。とにかく、こうした偉大な学者達が何をいつているのか、この提言に聞きながら私どもは現代の立正安國論を書くべきであると思うのであります。

かつて人類は、巨大な自然と戦うために、「道具」を造り、それを使うことを知った。つまり、人間をホモ・ファールとして捉え、そこに人間の特性をみ出し、それを人間の中心的活動とみてきたのであります。現代の科学技術文明はかかる基盤のうえに立っているといえましょう。

たとえば大乘仏教の「生」と「死」の対決からにじみ出る人間観、「日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく、人の寿命は無常也。出づる気は入る気を待つ事なし。風の前の露、尚譬にあらず。かしこきも、はかなきも、老たるも、若きも定め無き習ひ也、されば先ず臨終の事を習うて、後に他事を習うべし。」(一五三五)この人間観、ホモ・ファール。コノ・サキエンスには真の意味での生と死の対決がないのであります。キリスト教もそうです。キリストは死んだけれども復活した。靈魂云云。あのイージー・ゴイングな宗教のやりとりには、大乘仏教にみられるような生と死の対決がない。むしろキリスト教は靈魂主義だ。人間を越えるものとして靈魂がある、あたかも理性と並んで人間を支配して来た。

我々の仏教こそあの宗祖の言葉ほどきわめて重要な言葉だと思ふ。「日蓮幼少の時より仏法を学び候しが。人の寿命は無常なり。定め無き習ひ也。されば先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」と思い極めてやって来た、まさにモータルです。死すべき人間、この人間観がほうはいとして起つてこなければ、生命尊重という事が本物になるでしょう。ホモ・ファールやコノ・サキエンスから人間尊重の理念が出て来るでしょうか。死すべきものとしての人間、この根元に立つ時、三十二万メガトンの核爆弾を用いて地球を百五十回も破壊する武器を作っているという事は何んですか。公害という問題について我々がその伝道にあたって、悲惨さや恐怖について語るのではなく、このような事態を現代文明がどういう基本的性格をもち、現代文明の発想の基盤が何処にあるかということ明らかにすることであります。その為人間観の根源にふれ、宗祖の真実を打ち出さなければならぬという事なのであります。そして私のいいたい事は、公害という問題を個人の意識だけでなく、民衆の意識として確立することを、教化伝道の途上において考えねばならぬということであります。

ことに公害に対しては、民衆が互いに民衆に対する権利の自覚と、団結が公害を追放する唯一の力であり、戦いであるということ。このことを含めて現代の立正安國論は書かれるべきではないでしょうか。

しかし安国論の中にはすごい視点があるのではないですか。例えれば「如カズ、彼万祈ヲ修センヨリ、此一凶ヲ禁センニハ矣」(二一七)と、公害に対してはいろいろなアプローチがなされておりますが、けれども「一凶ヲ禁センニハ」の宗祖の立場を我々はとるべきではないでしょうか。

この宗祖の発想は我々にとってもっともっとと学ぶべきであります。

現代文明の悪魔性をエグリ出し、毒されてしまった人間性のエゴイズムをつきながら、当面のこうした公害問題に対決して行く時に、三災七難を宗祖の立正安国の立場があると思う。国土みだれる時鬼神みだる。鬼神みだるる故に万民みだるる、まさに自然であります。この示唆や発想を根源にふんまえて、そうして現代技術文明が象徴的に表わしている。しかも現実的な大きな魔として襲ってくる核と公害の問題、これと対決していく時、昭和四十六年、一九七一年の立正安国があると思うのであります。

